身の調査もまだけっして十分とは言えないからである。

一方，「特殊仮名遣」の観点からこの母音交替を眺めるとき，きわめて厄介な問題がそこに現れてくる。すでに扱った末尾音節交替の場合には，この種の問題はほとんどなく，たとえばaの交替母音eは区別のある音節においては常にe_2で現れ，従って，特に仮名表記の問題に関わらずに済んだのである。ところが，ここでは事情が異なり，aの交替音oは，ある場合には乙類(o_2)，ある場合には甲類(o_1)表記で現れ，しかもそれは，必ずしも単純一様ではない。従って，この母音交替の提起する問題は，上述の純粋に音韻的・形態論的な側面と，それとは別に書記法の問題という二つの側面があって，しかも両者は微妙に関連し合っている。しかし，この問題は後に譲って，最初にまず，この母音交替の基本的パターンとそれに関連する二，三の問題について触れておきたい。

4.1.1 a〜o 交替の基本型

この母音交替は，それが現れる語幹の音節構造に従って，次の四つの型に分けられ，そしてまた，私の確認したかぎりでは，この四つだけである。すなわち，

1）CaCa〜CoCo　例　pasa〔挟〕〜poso〔細〕
2）CuCa〜CuCo　例　kura〔暗〕〜kuro〔黒〕
3）CiCa〜CiCo　例　pira〔開〕〜piro〔広〕
4）Ca　〜Co　例　ka　〔彼〕〜ko　〔此〕

この母音交替が上に挙げた四つの型にかぎられるという想定は，たとえば語幹CaCaにおいて，そのうちの一方のaだけがoと交替する型は存在しない，従ってまた，古代日本語の厳密に非複合的な語幹として，一般にCaCoもしくはCoCaという音節構造はあり得ないという予測を含んでいる。

すでに検討した末尾音節交替において，a〜$e_{(2)}$交替の現れる2音節幹の音節構造は，語幹部にoを持つ「4段」〜「下2段」動詞(たとえばsoma/e_2〔染〕，toka/e_2〔解〕)を除いて，常にCaCa，CuCa，CiCaの型だけであり，CoCaという音節構造は一つも現れなかった。一方，o〜$i_{(2)}$交替の現れる語(幹)では，名詞的形式のawo〔青〕〜awi〔藍〕，maro〔円〕〜mari〔鞠〕を除いて，CaCoという音節構造は現れない。また，後者がma-roという複合形式に遡ることはすでに述べた。

しかしながら，実際に上代語の語彙を点検して見ると，CaCo，CoCaという音節構造をもった単語が，けっして数は多くないにしても，ともかく存在することは確かである。また，すでに見たごとく，有坂氏の「音節結合法則」の第3則は，このような語を「同一結合単位」と見なすことによって，そこにo_1が現れるかo_2が現れるかを問題としたものであった。しかし，この問題はむしろ二義的なものであって，最も肝心な問題は，そもそも同一語幹（厳密な意味で）内においてaとoは共存し得るかどうかということである。そして，これに対する私の答えは「否」である。その主たる理由は，今も述べたように，一般にoはaの交替母音として現れ，しかもその交替は上述の四つのワク内でしか起らなかったという想定に基づくものである。

そこで私は，有坂氏のそれとは違った観点から，母音の結合分布（または共起）に関する次のような法則をここに提起して見たい。すなわち，少なくとも日本語の本来的な語彙に関して，

「同一語幹内においてaとoは共存しない」

これはもちろん上代語の音節の結合関係について観察された「記述的法則」ではなく，むしろ古代日本語の語幹の性格に関する一つの理論的な仮説である。

しかし，この仮説がはたして妥当なものであるかどうかは，上代語の与え

る事実に即してもう少し検討してみる必要があろう。まず問題となるのは，先に触れたCaCo，CoCa型の結合を示す単語である。

4.1.2 aとoの共存を示す2音節語

問題となるこの種の単語は次のようなものである。これらの語の各々の"素姓"は多くは不明であるが，上代語の語幹の一般的パターンからはみだしていることだけは確かであり，厳密に非複合的な本来的語幹と見なし得るかどうかきわめて疑わしい。

こんなに沢山の単語が存在するのに「けっして数は多くない」んだそうである

まずCaCo型としては，

aso$_2$〔男子の親称〕<阿曽>(記仁徳他)［我兄<アセ>の転か。あるいは朝臣<アソミ>の約か。(時代別『国語大辞典』上代編24 p.)

kaso$_2$〔父〕<何曽>（仁賢紀）：外来語？

maro$_2$〔麿呂〕<麻呂>（万1783他）

ato$_1$〔跡〕<安刀>（万3625）：おそらくa(si)〔足〕-to〔処〕

kado$_1$〔門〕<可度>（万4418他）：おそらくka (cf. ja-ka〔宅〕) -to〔戸〕

kamo$_1$〔鴨〕<加毛>（記神代）

sato$_1$〔里〕<佐刀>（万859他）

pato$_1$〔鳩〕<波斗>（記允恭）

jado$_1$〔宿〕<屋度>（万3747）：ja〔屋〕-to〔処〕

amo〔母〕<阿母>（雄略記）：おそらくomo〔母〕の二次的転化（東国方言形）

awo〔青〕<阿乎>（万4514）：おそらく*owo（~awa/apa〔淡〕）の二次的転化。

kapo〔顔〕(可抱>（万3411）

sawo〔竿〕<佐乎>（万4062）

napo〔直〕<奈保>（万801）

pako〔箱〕<波古>（正倉院仮名文書）：（朝鮮語？）

mato〔的・円（仮名表記例なし）〕：ma〔目〕-to〔処〕？

mado〔窓〕<末止>（華厳音義私記）：おそらくma〔間〕-to〔戸〕

次にCoCa型の単語としては，

oja〔親〕<於夜>（万4408他）：おそらくojo〔老〕の二次的転化

ko$_1$pa〔強〕（仮名表記例なし）：<*kopo？ (cf. kawa〔乾〕)

koma〔肥〕（仮名表記例なし）：<ko〔肥〕-ma (cf. ko-ju〔肥〕)，あるいはko〔小〕-ma？

soba〔物植名〕<曽婆>（記神武）：？

so$_1$ma〔杣〕<追馬>（万2645）：？

so$_1$ra〔空〕<蘇良>（記景行）：<*soro (cf. so-soro〔空漠〕~sara〔曝・更〕，§**4.3.1**参照)

to$_2$ga〔咎〕<登我>（万3391）：おそらく*togo（~taga-pu〔違〕の二次的変化。

toma〔苫〕（仮名表記例なし）：アイヌ語起源？

poka〔外〕<保可>（万3975他）：おそらくpo〔端〕（~pa）-ka〔処〕

moda〔黙〕<母太>（万3976）：muda〔徒〕（~muna〔空〕）の二次的変化形？

jowa〔弱〕<余和>(神代記下・私記乙本)：おそらく*jowo<jop/bo~japa〔柔〕，後出）の二次的変化 (cf. joworo=joboro〔膕〕)

woka〔丘〕<乎可>（万4408）：【峯処（ヲカ）ノ義ト云フ『大言海』】

wosa〔首〕（仮名表記例なし）：おそらくwo〔居・食〕-sa【tuka-sa〔首・官〕を参照】